

# 心理学の立場から 現代の幼児教育を考える (三)

黒田実郎



## 一 性格理論の変遷と幼児教育

旧約聖書の箴言しんげん十三章二十四節に、「むちを加えない者はその子を憎むのである。子を愛する者は、つとめてこれを懲らしめる」という言葉がある。聖書の教えが絶対視されていたヨーロッパでは、従来、子どもに対してかなりきびしいしつけが行われてきた。もちろん、旧約聖書のみを信じるユダヤ教徒とは異なり、キリスト教徒は、きびしい戒律を説く旧約聖書と、無限の愛を説く新約聖書を、ともに聖典とみなし、その教えに従ってきた。したがって、キリスト教的文化の中で育ったヨーロッパの学者の教育理念を理解するには、彼らの思想の根底に、旧・新約聖書の教えのあることを決して見逃してはならないのである。

たとえば、ベスタロッチやフレーベルは、人格形成における母親の愛情の必要性を強調したが、究極的には、母親の愛情を通し

て、子どもに神の存在を意識させ、規律正しい習慣を養わせることが目的であった。それゆえに、彼らの教育精神には暖かさと同様に、きびしさがあった。

わが国でも古くから、子どもの教育に関して「愛のむち」という表現が用いられてきたが、過去においては、どの国においても、子どもはかなりきびしくしつけられてきた。ところが現代の日本やアメリカにみられるように、許容主義や温情主義が一般的傾向になったのはなぜであろうか。それにはいろいろな理由があるが、おもに心理学における性格理論の変遷という立場から、次に私見をのべてみよう。

一九三〇年代にナチスがドイツを支配して以来、ユダヤ系心理学者は大挙してアメリカに移住した。これによってドイツの心理学は壊滅状態におちいり、それ以後、アメリカが心理学のあらゆ

る領域で中心的な役割を果たすようになった。このため、現代における多くの国での幼児心理学やしつけの問題は、アメリカの動向を無視して考えることができなくなったのである。このような理由で、次にアメリカにおける性格理論やしつけの変遷について簡単にのべてみよう。

おもにイギリスからの移民によって開拓されたアメリカ合衆国においても、その建国当初は、ヨーロッパふうのきびしいしつけが行われていた。

就学前教育がヨーロッパから導入されたのは十九世紀後半であるが、最初はフレーベル主義が支配的であった。フレーベルの著書「人の教育」において示されているように、その教育理念は、神の法則と秩序を子どもに教えることであつたから、その当時の幼児教育は、キリスト教精神にもとづいたきびしい人格教育と、教師中心の主知主義的な教育が母体であつたといえよう。

ところがその後、公教育の普及にとともに、信教の自由という立場から公教育機関における宗教教育が排除され、人格教育の内容が変化することになった。また自由独立の精神を尊重するアメリカの国民性と、アメリカ独自の学術、文化の向上とによって、教育学や心理学の分野でも、アメリカ生まれのアメリカ人による、アメリカ的学説が誕生した。教育学の代表的学者はジョン・

デューイ、心理学の代表的学者はジョン・B ワトソンである。

ワトソンは行動主義 (Behaviorism) 心理学の創始者として有名であるが、アメリカの幼児心理学や育児方法にもいちじるしい影響をおよぼした。彼は乳児を愛撫することのかわりに、子どもは生まれたその日から厳格に統制された刺激条件（たとえば、皮膚的接触を最小限にとどめて、人工栄養による極端なまでに厳格な時間授乳など）に従うことを学習しなければならないことを強調したが、彼の育児方法は講演や雑誌を通して、一九三〇年代のアメリカ中流家庭の母親たちに、いちじるしい感化を与えたのである。

子どもの養育におけるこのような極端な合理主義は、科学的育児という名称のもとに、アメリカで広く普及したが、そのような方法で育てられた子どもたちの中に、いろいろな性格的欠陥をもつ者がしだいに多くなるにつれて、反動的に、全く対照的な育児方法が注目されるようになった。それは精神分析学に理論的根拠を置く許容主義である。

許容主義的育児は、一九四〇年代の後半から五〇年代にかけて盛んになったが、これを推進した心理学者のひとりとは、精神分析学派のマーガレット・リップで、その著書 "Rights of Infant" は「乳児の精神衛生」という題で津守真他によって訳されている。

育児評論家として世界的に有名な小児科医、ベンジャミン・ス  
ポック博士も、一九四〇年代から一九五〇年代の中ごろまでは、  
精神分析学にもついた許容的育児の推進者であったが、一九六  
〇年ごろから、彼の主張はかなり中庸的なものへと変わっていつ  
た。一九六七年に彼は「モンテッソーリ・スクールと伝統的アメ  
リカン・ナースリー・スクール」と題する論文を書いたが、その  
ころの彼はモンテッソーリ保育とアメリカ的自由保育とは質的に  
相違するものではなく、たんに量的な相違にすぎないことを指摘  
し、幼児保育の面でも中立的な態度をとっていた。ところが最近  
になって、彼は子どものしつけや教育に関して、極端に権威主義  
的な態度を示しはじめた。彼は自己批判書の中で次のようにいっ  
ている。

「権威のない教育はありえない。義務と罰則のないモラルもあ  
りえない。父兄よ、私の本を焼け、そして、愛する子にはムチ  
を」という古来の教えに戻ろう……」

「スポック博士の育児書」は、アメリカだけでも二千万部以上  
が売られ、英連邦諸国や日本などでもかなり読まれているので、  
彼の影響力はアメリカだけではなく、世界的なものだといえよ  
う。そのような彼が時代の変遷とともに教育思想を極端に変えた  
ということ、たんに育児上問題だけではなく、人類の文化にと

ってもゆゆしい出来事なのである。

スポック博士の主張はなぜこれほど変化したのであろうか。研  
究と経験の積み重ねによって主義主張が変わるのはむしろ望まし  
いことであるが、彼の場合、その変化は、研究の裏づけによるも  
のというよりも、社会の変動や時代精神の変化によるものと見な  
す方が適切かもしれない。

一九六〇年代の後半から、若者の造反や退廃的な生活態度が次  
第に顕著になったが、その原因は、「スポック博士の育児書」に  
よって育てられた子どもたちが青年期に達したためだという批判  
がなされた。その後、スポック博士の思想は徐々にハト派からタ  
カ派へと移行していったが、果たして過去における彼の主張と、  
最近の自己批判とは、いずれが正しいか容易に判断できかねるの  
である。

## 二、むすび

スポック博士に限らず、アメリカにおける幼児教育思想や育児  
方法は、政治、経済、文化の変動によって、かなり左右されてき  
たように思われる。幼いうちに子どもを大人のきめたわくにはめ  
込もうとするワトソンの科学的育児法がアメリカで普及したのは  
一九三〇年ごろの不況時代であった。乳幼児の心理学的研究にお

いて許容主義的な論文が圧倒的に多かったのは、第二次大戦後の繁栄時代であった。一九五七年のスポーツ・ショックは知的早期教育に拍車をかけ、その結果、ピアジェ、モンテッソーリの学説が復活し、ブルーナーが台頭した。そしてベトナム戦争の失敗による社会的混乱と最近の経済的不況は、遂に性格心理学における権威主義的傾向を助長するにいたつたのである。

第二次大戦後、アメリカに追随してきたわが国でも、許容主義に対する反動として、石原慎太郎の「スパルタ教育」や、羽仁進の「放任主義」が一般大衆に読まれたり、知的早期教育の賛否が識者の間で論ぜられたりしたが、肝心の基礎的研究はそれほど行われていない。

乳幼児の性格形成に関する理論と研究の面では、従来、精神分析学派が最も大きな役割を果たしてきたが、S・フロイトは情緒安定の要因として、生物的欲求の充足を重視し過ぎたように思われる。

最近、英国の精神分析学者J・ボウルビイは、母子のきずなが、おもに身体的欲求の充足にもとづいて形成されるというフロイト説や二次的動因説を否定して、新理論、愛着行動制御説を提唱した。彼によると、養育者に対する乳児の結びつきは生得的反応に基因するもので、社会的、心理的接触を求める乳児の欲求

が、身体的欲求と同様に、あるいはそれ以上に、愛着性 (attachment) の形成にとつて重要だと考えられている。彼はその一例として、イスマエルのキブツの子どもの愛着性が、身体的養育者であるメタベレットに対してよりも、精神的に接触する両親に対して形成されるという事実をあげている。ボウルビイの新学説は、子どもの情緒の健全な発達にとつて、成人との精神的きずながどれほど大切かということを示唆している点で、われわれ幼児教育関係者に貴重な教訓を与えるものといえよう。

ボウルビイのもう一つの功績は、比較行動学の最近の研究資料と研究方法とを心理学に導入した点である。動物や人間の生態を、おりや実験室の中ではなく、自然的環境の中で観察し、分析する比較行動学の研究法は、幼児心理学者や幼児教育学者が今後大いに取り入れなければならない点である。

政治や社会の変動に左右されることなく、ありのままの子どもを観察し、その発達の可能性を伸ばすことが、幼児研究者の課題だといえよう。

(聖和女学大学)